方言よもやま話

―信州方言とそのおもしろさ―

馬瀬　良雄

はじめに

お早うございます。大橋先生から「方言よもやま話」というテーマを頂きました。内容についてお尋ねすると、「１時間あまり信州方言を中心に好きなことを話してほしい」とおっしゃる。皆さんを前に、時間の来るまで「信州方言漫談」をすればよいのだと思い、先生に感謝を捧げつつお引き受けしました。

本講座がオープンして、トップバッターの出野先生、続いて塩入先生、さらには大橋先生のレジュメが次から次へと届きます。さっそくそれを拝見すると、どれも大部なだけでなく、内容も本格的な堂々としたもの。私はそのすばらしさにすっかり圧倒されてしまいました。ひるがえって私も「信州方言漫談」では済まされなくなりました。自分の甘さに気づき、まじめにお話をしなければならないことを悟りました。

そこで、長野県各地、北信・東信・南信・中信の方言について録音などをお聞かせし、興味深い方言的特徴を説明し、最後に締めくくりたいと存じます。前置きはこの程度に致しまして、さっそく本題に入ります。

１．北信地方の方言

ここでは北信地方を上・下水内、上・下高井、更級・埴科地方と規定します。

１．１　信越国境秋山郷（下水内郡栄村）方言

秋山郷といえば、皆さんよくご存じの平家の落人伝説もある秘境で、冬は４メートルの積雪に埋もれ、かつては半年にわたり陸の孤島ともなりました。ここの方言は種々の特色を備えています。まずは録音を聞いてみましょう。お話しくださるのは山田い志さんとおっしゃる、そこの小赤沢集落生え抜きの1889（明治22）年生まれのおばあさん、聞き手は私。古い録

音ですが、それだけに昔の秋山郷方言の語り口を伝えてくれます。これはおばあさんが外来者である私に比較的分かりやすくお話してくださったものです。次の１．１．１は馬瀬良雄（2002）から引用いたしました。詳しくは同文献をご覧ください。

１．１．１　秋山の名の由来と秋山の亡霊

話し手　Ｉ　山田　い志
聞き手　　馬瀬　良雄

> 昔、中津川の対岸に秋山という集落があったが、飢饉で亡びてしまった。そこの墓場から亡霊が出てきたが、供養したら、それ以後出なくなった。

Ｉ　アチヤマ[1]　アチヤマッテ　ヨーデモ　　アチヤマソァー
　　秋山、　秋山って　　言うけれども、　秋山はさ、

　　アラー　アノ　モコァーッペタラテ　　アー　　ヤシキ[2]ラ
　　あれは　あの　（川の）向こうがわだよ、　ああ。　屋敷だ、

　　ソコネ　ハカバモ　アロシソァー　ソコエソァ　モト　　ホラ
　　そこに　墓場も　　あるしさ、　　そこへさ、　もと、　ほら、

　　コッチャーソァー　　オラホァノ　　アマサケ[3]ト　ヨー
　　（川の）こっちではさ、　私たちの方の　甘酒と　　いう

　　ドコモ　　ツボレテ　シネソァ　ヤボツ[4]ッテ　ヨー　ドコモ
　　ところも　つぶれて　死にさ、　矢櫃と　　いう　ところも

1．秋山郷の名のもととなった秋山という集落は、今の屋敷地籍にあったが、1783（天明３）年の飢饉でほろびた。
2．地名。屋敷は、秋山郷の中心小赤沢とは中津川を距てて、対岸のやや上流に位置する。
3．天酒とも書く。現在の小赤沢地籍にあった。鈴木牧之『秋山記行』によれば、1828（文政11）年、彼が甘酒村を訪ねたときは２軒あった。しかし、この２軒も1836（天保７）年の飢饉でほろびた。
4．現在の小赤沢地籍にあった。1783（天明３）年の飢饉で全滅した。

エーガ　アッタン　ツボレテ　ネアン　アチヤマッテー
家が　あったのが　つぶれて　ないのだ。　秋山って

ヨー　ドコネ　オチガ　アッタンダレモ　メンナ
いう　ところに　うちが　あったんだけれども、　みんな

ツボレテ　シマッテ　ネァンソァ　モカシャ　クンガ
つぶれて　しまって　ないのさ。　昔は　食うもんが

ナカッタン　ダベ　ンー
なかったん　だろう、　うん。

I　ソァーシテソァ　オエデァラ[5]ノ　オッサマー　ケーラケ[6]ノ
そうしてさ、　大井平の　和尚様が　切明の

オンセンネ　エグテンデ　アノ　アチヤマオ　トーッタッツォ
温泉に　行くといって、　あの　秋山を　通ったってさ、

オエデラノ　オッサマガ　ホァー　シタラ　ハカバカラソァー
大井平の　和尚様が。　そう　したら、　墓場からさ、

ボァーズメータモンガ　ゾロゾロゾロト　オッサマノ　アトー
ぼうずみたような者が　ぞろぞろと　和尚様の　あとを、

チ[7]　デタ　テンダデー　ホァーシテ　オッサマー
来、　出た　というんだよ。　そうして　和尚様は

タマゲテ　ヤレ　オレガ　アノ　ハカバン　ドコ
たまげて、　やれ、　私が　あの　墓場の　ところを

5．地名。現在、新潟県中魚沼郡津南町に属する。信濃川の右側に位置し、小赤沢から7里半（約30km）あるという。
6．地名。秋山郷の集落からさらに奥に入ったところにある。ケーラケはキリアケの変化形。キラケ、チラケとも言う。現在そこに発電所がある。切明温泉は疝気、痔、中風に効くという。
7．言い間違い。

トーッテ　キ[8]タンダガ　　コラ　　マー　タマセーラト　モッテ
通って　　来たのだが、　これは　まあ　魂だと　　思って、

ソァーシテ　モドッテ　ハカバオ　シンケンネ　オガンデソァ
そうして　　戻って　　墓場を　　真剣に　　拝んでさ、

ホァーシテ　エッタラ　　コンダ　ナンデモ　デネァッツォ
そうして　　行ったら、　今度は　何にも　　出ないっていうことだ。

名にし負う秋山郷の方言です。お分かりになりにくかった点も多かったと存じます。時間もありませんので、発音だけに限ってご説明しましょう。

1.1.2　発音の特徴

1.1.2.1　-オと-オァ

母音とか子音とか言うとなにか難しい話と思われがちですが、まずは録音をお聞きになってください。話者は山田ちよさん（1904年生）。やはり秋山郷の小赤沢生まれの方。収録は1980年。

（録音）　トージ（冬至）　　トァージ（湯治）

皆さんは「冬至」も「湯治」も共に同じトージと発音すると思いますが、秋山郷では二つのことばの発音ははっきりと違います。「冬至」はトージですが、「湯治」はトァージのように発音します。「冬」と「湯」の部分を比べると、「湯」のほうは「冬」に比べると少し大きく開けて発音します。もう一度録音をお聞きになってください。

（録音）　トージ（冬至）　　トァージ　（湯治）

二つの発音は違うことがお分かりいただけたと存じます。これはなにに基づくかと申しますと、漢字音の仮名遣い、トウ（冬）とタウ（湯）の違いをトーとトァーという発音の違いとして残しているのです。もう一例聞いていただきましょう。

（録音）　ヨージ（用事）　　ヨァージ（楊枝）

古い漢字音の仮名遣いで「用」はヨウ、「楊」はヤウ、その区別をヨーとヨアーというかたちで今も保っているのです。

これはいつ頃の日本語の状況かと申しますと、室町時代末の京都の標準

8．[kçi]

的な発音なんですね。当時宣教師たちが大勢日本にやってきて布教活動に携わりました。彼らはその一方で当時の日本語についても豊富な記録を残しています。その中にＪ．ロドリゲスという神父がおりまして、彼は『日本大文典』というすばらしい大著を残しました。この本ではトージ（冬至のトーの母音をÔ、トアージ（湯治）のトァーの母音をŎのように書き表し、前者を「すばるo」、後者を「ひろがるo」と呼んで区別しています。秋山郷方言の古老たちは古い京都語の発音の特徴を今に引継ぎ保持していることが分かります。

１．１．２．２　-エと-エァ

次は「見えた」と「蒔（ま）いた」の発音をとります。

（録音）　メータ（見えた）　　メァータ（蒔いた）

「見えた」と「蒔いた」を共にメータと発音する方言は少なくありませんが、秋山郷方言では一方はメータですが、もう一方はメァータのように発音します。メーに比べてメァーの方が口を少し大きく開けて発音します。

同じような例を録音で聞いていただきましょう。

（録音）　ネータ　（煮えた）　　ネァータ　（泣いた）

へー　（ヒエ―植物―）　　へァー　（灰）

この二つを区別する方言は、新潟県から東北地方にかけて結構あります。

１．１．２．３　７母音体系

このように見ると秋山郷方言は、５母音の共通語より２母音多い７母音の母音体系を持っていることが分かります。共通語の体系と比べて次に示しましょう。

図１　共通語

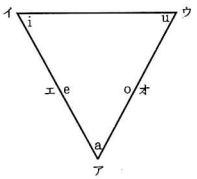
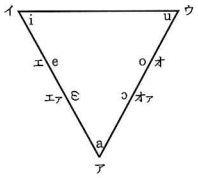


図２　秋山郷方言



さて７母音の体系ともなりますと、共通語の５母音の体系よりも２母音多いわけで、そこで母音の過密状態が生まれます。その結果ウ段音とオ段音の混同、イ段音とエ段音の混同が起こってきます。

エチ（息・駅）　カメ（紙・亀）　カベ（黴・壁）‥‥

オマ（馬）　ノノ（布）　モッツ（六つ）　ロッポ（ロープ）‥‥

1．1．2．4　ハ行唇音

古い発音が今に保たれている例を二つ取り上げます。まずはハ行の発音です。録音を聞いていただきましょう。

（録音）フィ〜フェ（火・日）　フィャコ（百）

共通語のようにヒ（火・日）、ヒャク（百）とは発音しないで、両方の唇を合わせて上のように発音しています。ただし、共通語のハ・ヘ・ホにあたるところは、ハナ（花）・ヘ（屁）・ホ（穂）などのように［h］で始まる発音が聞かれます。これも以前は唇の音で始まるファ、フェ、フォが使われていたと思われます。収録当時、ゴファン（御飯）、フェリ（縁）などの発音をする古老もいました。室町時代末来日したキリシタンたちはハ行の子音を次のようにfで表記しています.

fi（火・日）　fyacu（百）　fana（花）　feri（縁）　fo（穂）

このように見ると、秋山郷方言のフィ〜フェ(火・日)などの子音の発音は室町時代末の京都語の面影を今に伝える貴重な発音の特徴の一つと言えます。ただ、秋山郷の古老の発音も当時f＞hの変化の過程にあることを物語っています。

1．1．2．5　クヮ・グヮ

秋山郷の古老は「菓子」「観音」「火事」「元日」「本願寺」を次のように発音します。

クヮシ（菓子）　クヮンノン（観音）　クヮジ（火事）

グヮンジツ（元日）　ホングヮンジ（本願寺）

現代ですとカ・ガと発音するところを、クワ・グワのように発音しています。これは漢字音で合拗音と呼ばれる古い発音を現代に伝えるものです。宣教師たちはQuaxi（菓子）‥‥、Guanjit（元日）‥‥のように表しています。

このクヮ・グヮは漢語だけでなく和語にも現れます。クヮ（桑）・クヮット（かっと〈擬態語〉）、グヮングヮン（がんがん〈擬声・擬態語〉）などのように。

1．1．2．6　キとチの混同

次の録音を聞いていただきましょう。

（録音）チレガ　フカコデソァ　チンノチガ　メーネァーガナー（霧が深くてさ桐の木が見えないよなあ）。

キとチの混同が見られます。これはもちろん室町時代末の京都語の名残などではなく、新しい変化です。東北方言でキとチの混同のあることは有名ですね。

1．1．2．7　共通語撥音／秋山郷方言促音

最後に共通語の撥音（ン）に秋山郷方言の促音（ッ）が現れる例をお話ししましょう。

（録音）ベッポ（貧乏）　サッツァ（さんざん）　サッチョ（3升）

お聞きになったように、共通語の撥音に秋山郷方言の促音の対応している例が幾つか見られます。こういう方言が、長野県ですと木曽の旧開田村（現木曽町）、県外では岐阜県大野郡高根村日和田、山梨県南巨摩郡早川町奈良田、静岡市井川、東京都八丈島町など、東日本の名だたる秘境の方言には認められます。これは室町末の京都語の特徴などというのではなく、おそらく東日本の古い古い方言的特徴と関係のあるものだと思います。

1．1．3　秋山郷方言の発音の特徴―まとめ―

このほかにも秋山郷方言の発音の特徴はいくつも挙げられますが、最後にまとめると次のようになります。

1　室町時代末の京都語の面影を今に伝える発音の特徴が残っている：母音‐オァ・ハ行唇音・合拗音（クヮ・グヮ）
2　東日本の古い発音の特徴と考えられるものがある：撥音の促音化
3　新しい展開と見られる発音・発音の混同も認められる：母音‐エァ・キとチの混同‥‥

1．2　チョーマ（千曲川）

1．2．1　チョーマをめぐって

水の流れに　花びらを
そっと浮かべて　泣いた人

ご存じ「千曲川」の歌い出しの部分です。3番では、

一人たどれば　草笛の
音（ね）いろ哀（かな）しき　千曲川

と川の名も出てきます。この川の名は現地でも「ちくまがわ」と思っていらっしゃる方が多いと思います。ところが北信地方の方言ではこの川をチョーマというところが多いんです。北信で「千曲川」をどう言うか調べた資料があります。図3をご覧になって下さい。白黒のいちょうの葉っぱの形のスタンプを押したところがチョーマです。東信境に行くとチューマとなっています。白抜きのいちょうの葉っぱの形のスタンプを押しました。そして越後境では白抜きの少し大きな黒丸を押してあります。ここはチグマです。チクマと答えたところもあります。一口に申しますと、北信の越後境を除き千曲川に比較的近い地域ではチョーマが色濃く分布しております。「千曲川」がなぜチョーマなんでしょう。千曲市に事務局がある地域研究者の団体があります。その機関誌の名はなんと「ちょうま」。この方々に伺うと、チョーマということばは誌名にもなるほど親しみのあるもので、「千曲川」をチクマ(ガワ)と言ったのでは、なんとも母なる川のイメージは沸いてこないとおっしゃる。チョーマの語源については、今までいろいろ言われて来ましたが、納得させるものがありませんでした。

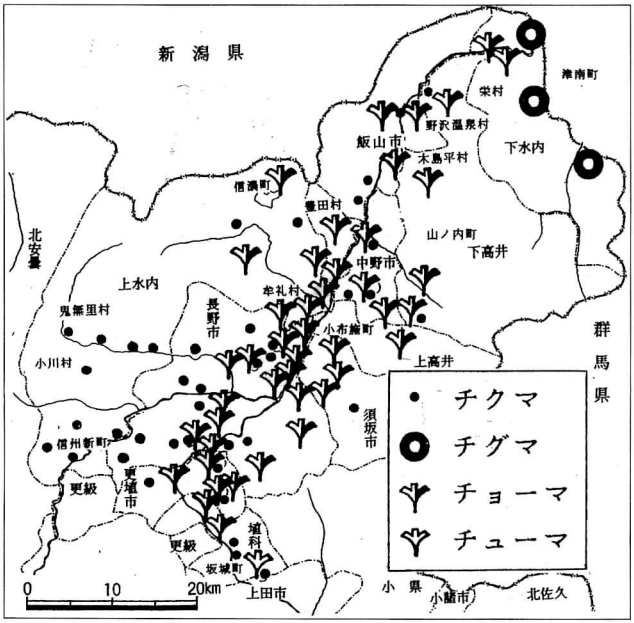


図3「千曲川」の方言

時間もありませんのでさっそくこれについての私の考えをお話してご批判を仰ぎたいと思います。

1．2．2　チョーマの語源

1．2．2．1　チョーマはチューマを経てチウマにさかのぼる

私はチョーマの語源は発音の変化ということで解き明かせると思います。北信の方言では、ユはヨに、シュはショに、チュはチョに発音されることが結構多いんです。例えば、ヨ（湯）・ヨックラ（ゆっくり）、オンナショ（女衆）、チョーニン（仲人）といった具合です。そうすると、チョーマはチューマの変化形ではないかと考えるわけです。

次に、チューマはチウマが変化したものと考えます。これは比較的簡単ですね。例えば、「宇宙飛行」とか「宇宙旅行」と言います。その「宇宙」の「宙」と言うことばをとりますと、漢字音はチウなんですね。つまり、チウが変化してチューとなったのですが、それと同じようにチウマが変化してチューマとなったと考えるわけです。

1．2．2．2　チウマはさらにチグマにさかのぼる

次に進む前にちょっとこんなことを考えてみましょう。「かわいそうだ」ということを北信ではかなり広い地域でモーラシイと言います。このモーラシイはなんに由来するかと言えば、モゴラシイでこれはムゴラシイの変化形です。ここ東信では一般にオヤゲナイとかオヤゲネーを使いますね。さて、このモーラシイはモゴラシイのゴのガ行子音が脱落して生まれたものです。ガ行子音の脱落は北信でも特に飯山地方に激しくて、例えば、飯山市富倉では次のような語にそれが認められました。

スーニ(すぐに)　タマエタ(たまげた)　カーミ(鏡)　モーサ(もぐさ)

モーラモチ(もぐら)　ショート(仕事)　ミーッカ(右側)

このような語中でのガ行子音の脱落はかつては北信のかなり広い地域に起こったのではないでしょうか。この考えをチウマにあてはめますと、チウマの前身はチグマということになります。つまり、

チグマ＞チウマ＞チューマ＞チョーマ

の変化をたどったと考えられます。

1．2．3　『万葉集』巻14「東歌」の「知具麻」

さて、チョーマの語源として推定したチグマは、文献の上で証明できな

いかというと、実はできるのです。

『万葉集』の中に東国の歌を収載した「東歌」という巻があります。その中にこんな歌があるのです。

信濃なる知具麻能河泊（チグマノカハ―千曲の川―）の細石（さざれし）も君し踏みてば玉と拾はむ（巻14・3400）

大意は「信濃の国を流れる千曲川の小石もあなたが踏んだものならば玉として拾いましょう」。注意すべきは、「千曲川」が「知具麻能河泊」となっている点です。「知具麻」の「具」は濁音節グを表します。方言チョーマの語源として推定したチグマとぴたりと一致します。もし「ちくま」のように「ク」と清音節ならば、「九」「久」のような万葉仮名を使わなくてはなりません。

1．2．4　『万傳書覚帳』（1752）の「ちぐま川」

では、チグマはいつごろまで使われたでしょうか。最近それを示す貴重な資料が公にされました。渡辺喜代子『川中島平の昔のはなし―「万傳書覚帳」の世界―』（2005）の中にそれは現れています。本書は長野市篠ノ井上石川穂苅吉幸家に伝わる「万傳書覚帳」の翻刻と詳細な解説で、千曲川の氾濫とその惨状を伝える生々しいルポルタージュをはじめ、村内で起こった出来事が収められています。この文書の中に千曲川を「ちぐま川」と表記している例が複数箇所出ています。　その一つを図4として示しましょう。ですから、北信ではこの頃まで千曲川はチグマガワと濁って発音されていたことが分かります。

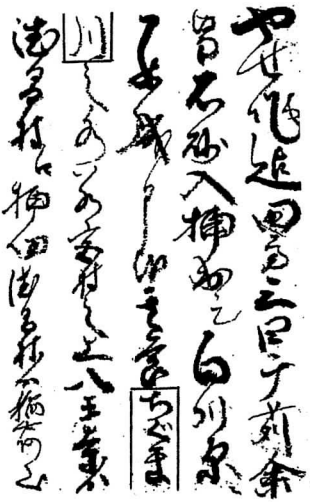


図4「ちぐま川」の表記
（『万傳書覚帳』）

1．2．5　近世後期善光寺界隈の方言

一方、チューをチョーと発音する傾向については十返舎一九は『続膝栗毛』九編「善光寺道中」下冊（1819）の中で善光寺界隈の方言についてこ

う書いています。

この辺にては十をじやう、……久をきやうといひ、忠をてうといふ、ことばのまちがひあり、

これは江戸時代でも末期に近いものですが、当時善光寺辺りでは、十をジョー、久をキョー、忠をチョーと発音する特徴があるということを述べたものです。したがって、チグマがチウマと発音されるようになりますと、チューマを経て、少なくともこの頃にはチョーマと発音されるに至ったと推定されます。

1.2.6　補い

最後に簡単に一つ二つ補って「東信地方の方言」に進みたいと存じます。

一つはチョーマの分布についてであります。先ほどの図3を見ていただくと、チョーマは坂城町の東信境ではチューマとなっていますね。また、チョーマは千曲川の流域に多いということです。これらを総合するとチョーマは北信地方千曲川流域越後境と東信境を除き、かつ、千曲川と関わりを有する千曲川流域に限定されると見てよいと存じます。

では、チューマはどこまで広がっていたでしょうか。私は、東信境でチューマであること、さらに、『南佐久郡志』(1919)の「方言」の項を見ますと、「ちうま　千曲川」と載ること、かつ『東信濃方言集』(1976)にも同様の記載のあること—これらを勘案すると、チウマ〜チューマは東信地方の千曲川流域に行われていたことは確かだと思われます。ただし、チウマと発音されたものか、チューマとも発音されたものかなどは、厳密にはかなり難しいですが、少なくともチグマのガ行鼻音が脱落した方言チウマないしチューマが南佐久辺まであったことは確かだと思います。

もう一つ、越後境の栄村ではチグマと発音されていますが、これは『万葉集』時代の東国方言の姿を今に伝えるものであります。さらに付け加えるならば、千曲川は新潟県に入ってもしばらくの間はチグマなんですね。中魚沼郡の津南町、ここは冬4メートルを超える豪雪地帯としても有名ですが、この辺まではまだチグマです。新潟県に入ると信濃川というのは地理学や学校教育の場でのことのようですね。

なお、チグマは「千・隈」、つまり「屈曲の多い（川）」に由来すると見ます。

2．東信地方の方言

北信地方の方言、まだまだお話したいことは山ほどありますが、この辺で東信地方の方言に移ります。上田市以東の千曲川上流域、つまり、小県、南・北佐久地方が東信地域であります。ここでは初めに佐久市方言をご紹介いたしましょう。佐久市の中でも群馬県に近い内山と中込の二人の方の対話です。比較的短い録音ですが、この地方の方言の特徴が良く現れております。なお、収録と文字化は話者の一人宮嶋正範氏。

2．1　朝の挨拶―佐久市方言

I　井出猪喜重（佐久市内山）1912年生まれ

M　宮嶋正範　（佐久市中込）1944年生まれ

M　オハヨーゴワス。

I　オハヨーゴワス。

M　今日ワ　ドッカ　オ出カケニ　ナリヤスカイ。

I　山セー（～へ）　エカズトモーガ（行こうと思うが）。

M　マーンチ（毎日）　照リコンデ　湿リガ　無クテ　弱ッチマイヤスイナー。

I　フントニ　ドーモ　ガトーノ（大変な）　照リデ‥‥

M　オ宅ジャー　菜ー　マキヤシタカイ。

I　マダ　湿メリガ　ネーカラ　菜モ　マカネダガ、エー　程イイ　湿メリヲ　ミテ　コレデ　菜ーモ　マキテーケレドモ、ハイ（もう）　時期ダカラ。

M　ソーデヤスイナー。

I　アー　ソレデモ　オー　シガン（彼岸）ガ　チケー（近い）カラ　アージンジン（順々）ニ　涼シク　ナルベー。

M　今日ワ　ユーダチャー　来ヤスカイナー。

I　ヨーダチャー（夕立が）　マー　来リャー　イイダガ、昔ノ　ショー（衆）ワ　アー　ヨーダチャー　来リャー　ターラ（俵）　来タッテ　ユーダニ（言うんだよ）。

M　ターラ　来タッテ　ドーユー　コトデヤスイ。

I　ソリャー　米ガ　エッペー（一杯）　取レルカラサー。

M　コレデモ　一番　シデー（ひどい）　ユーダチャー　ドコカラ　来ヤ

スイ。

I　コノ　南ノ　方ノ　蓼科ダチ（蓼科山方面からの夕立）ッテ　ユーガ　アー　コー　コッチカラ　来ル　ヨーダチャー　センダクモノ　エレル（入れる）　手間モ　ネーックレー（無いくらい）　エー　ソノー　早クッテ　ツエー（強い）　ヨーダチダ。

M　コレデモ　8月モ　ヘー　終ワリダケド　マダ　ユーダチャー　アリヤスカイナー。

I　コーユー　暑イ　年ダカラ　アー　シガン（彼岸）過ギマデモ　アルズラヨ（あるだろうよ）。

M　ソーデヤスカイナー。アリャ　コリャ　オモシレー　話　聞イテテ　山セー　オ出掛ケノ　トコー　邪魔シチマッテ……。ソイジャー　コレデ　ゴメンナンシ。キズイテ（気を付けて）　オイデナンシ。

I　アリガトゴワス。アチャ（それでは）　ゴメンナンシ。

2.1.1　目ぼしい方言的特徴

目ぼしい方言の特徴を探ってみましょう。

1）連母音の融合が激しい。例。チケー（近い）／シデー（ひどい）／ツエー（強い）

2）ヒとシの混同がある。例。シガシ（東）／シガン（彼岸）

3）ジュ＞ジ。例。ジンジン（順々）

4）「方角」を表すセー。例。山セー（山へ）。

5）丁寧表現のゴワス、ヤス。例。オハヨーゴワス／ソーデヤスイナー

6）推量表現のベーとズラ。例。涼シク　ナルベー／アルズラヨ

2.1.1.1　連母音の融合

この特徴は佐久から南信の諏訪地方の方言に著しいと言われます。文中にはここに上げませんでしたが、マキテー（蒔きたい）、オモシレー（おもしろい）などたくさんあります。文中にはありませんでしたが、メール（見える）、ケール（消える）や、アロー（洗う）、シロー（拾う）などもあります。初めの2例は連母音‐イエが‐エーとなるもの、後の2例はワ行五段動詞の終止・連体形の母音‐アウや‐オウが‐オーとなるものです。

2.1.1.2　ヒとシの混同

この特徴は東信、特に佐久地方の方言的特徴として有名で、他郷で薬局

へ「氷嚢」を買いに行ったら「樟脳」を渡されたなどという笑い話がまことしやかに語られています。その程度に佐久方言ではヒとシの混同が激しいが、私はこの混同はそれほど古いものではないと見ています。その理由はこうです。江戸中期の俳人夏炉庵兀雨（こつう）の手になる「信濃佐久方言尽知世保久礼」には当時の佐久方言の特徴がふんだんに盛られています。「いの字もゑの字も、のゝ字もぬの字も、分からぬがちにて」のように、当時の佐久方言でイトエ、ヌとノの混同を初めとして、連母音の融合があちこちに現れているなど興味深いですが、ここには「ヒとシの混同」が全く見当たりません。さらに明治初年武田喜伝治の手になる佐久方言集『俚言鈔』(1875) をひもといても、そこには訛語の類も幾つか載っていますが、ヒトシのめぼしい混同例は認められません。これらを参照すると、佐久地方でヒとシの混同の萌芽的なものはあったとしても、現在のように音韻的対立を失ったのは、比較的新しいことではないかと思います。東御市北御牧八反田の渡辺瀬喜氏（1910年生)、渡辺次子氏（1913年生）にはヒとシの混同はほとんど認められませんが、両氏の長男である渡辺隆喜氏（1936年生）にはヒとシの混同が顕著だということです（渡辺喜代子氏直話)。これなども上の推定を裏付けるものだと存じます。

2．1．1．3　ジュ＞ジ、シュ＞シ

文中にジュ＞ジの例としてジンジン（順々）が上がっていますが、それと平行してシュもシとなる例が幾つも見つかりました。ジュ＞ジの例と共に示します。

シュ＞シ　シジン（主人）　シンブンノシ（春分の日）　シン（旬）
ジュ＞ジ　ジンサ（巡査）　ジミョー（寿命）

もっとも中には文中のショー（衆）のようにシューがショーになった例もあります。

2．1．1．4　「方角」を表すセー

文中、「山セー　行カズ」「山セー　オ出掛ケノ　トコ」のようにセーが使われています。意味は「方角」を表し、語形のうえでは関東方言の「山サ　行ク」のサと関係を持っています。

これらは山エ・山イ、時にはヤメーのようにも言いますが、こちらの方が新しく、山セーが古いと意識していました。

セーは「方角」を表すだけでなく、次のような例が佐久市瀬戸方言から採録されています。

ウチセー　ケーッテ　来タ（うちに帰ってきた）。

紙セー　書ク（紙に書く）。

役場セー　勤メテル（役場に勤めている）。

足セー　タビヨ　ハク（足に足袋を履く）。

テレビセー　映ル（テレビに映る）。

セーは「方角」や「所」などの意を表す「さま（様）」に助詞「へ」の接続した「さまへ」に由来していると考えます。平安後期の日記文学『更級日記』の例を一つあげておきましょう。

この暁にいみじく大きなる人魂のたちて京さまへなむ来ぬる。

この「さまへ」がサエとなり、さらにセーとなり、この地方で用いられているのです。

2.1.1.5　推量表現のベーとズラ

佐久市方言では群馬県寄りの地域ではベーを使います。文中「涼シクナルベーニ」とあります。一方、「アルズラヨ」のようにズラも使われています。

では二つの「推量」を表すベーとズラとはどう違うのでしょうか。佐久市瀬戸ではベーの表す「推量」はズラの表す「推量」よりも確実性が高いとおっしゃる方もいました。ベーは古典語「べし」に由来します。ズラは古典語「むとすらむ」に由来すると言われています。ズラについてはまた後でもう一度触れたいと思います。

2.1.1.6　丁寧表現のゴワスとヤス

文中ゴワスが使われています。

①　オハヨーゴワス。　　②　アリガトーゴワス。

どの場合も「丁寧」を意味する補助動詞として用いられています。

また、ヤスが文中で頻用されています。

①　オ出掛ケニナリヤスカイ。（M氏）

②　菜ー　マキヤシタカイ。（M氏）

③　ユーダチャー　キヤスカイナー。

④　ユーダチャー　アリヤスカイナー。

⑤　ソーデヤスイナー。

⑥　ドーユー　コトデヤスイ。

よく見ると、①～④は助動詞として使われ、⑤～⑥は補助動詞として使われていることが分かります。ヤスも「丁寧」を意味します。全部の例がM氏のことばです。年少のM氏が年長のI氏に対し「丁寧」を意味するヤスを使うのは当然といえば当然でしょう。一方、ゴワスはＩ氏とM氏の両者が使用しています。この例はすべて形式化された挨拶ことばの中に出て来る点に特徴があります。

最後にゴワスとヤスの語源について簡単に触れておきましょう。ゴワスは「ごわんす」、さらにさかのぼって「ござんす」に由来すると言いますので、最終的には「ございます」に行き着きます。一方、ヤスは近世の文献にもよく現れますが、語源ははっきりしません。『日本国語大辞典』には「①あります説、②おわす説、③ます説、④あそばせ説」など紹介した上で、「諸説あって明らかでない」としています。

3．南信地方の方言

南信とは、諏訪地方と伊那地方―上伊那と下伊那の全域―を指します。ここではまず、上伊那の南端中川村葛島の清水悟郎氏（1909年生）ご夫妻のご協力で作成した録音テープをお聞きいただきます。そのあと、言語地図を使って方言分布の面白さや、地図をどう読み解いて方言の歴史に迫るかなどについてお話ししたいと思います。

3．1　上伊那郡中川村葛島方言―煙草屋の店先で―

おじいさん（A）が知り合いのおばあさん（B）の営む煙草屋にたばこを買おうと立ち寄るところから始まります。

A　ゴメンナンショ。ゴメンナンショ。オ留守カナ。（大きな声で）ホエ（もし）　ホエ。タボコー　オクンナンヤレ。（大きな声で）黙ッテ　ムラッテ　行クデナム。エコー　二ッツ。260円。　ココイ置イトクニ。（独り言）ヤッ、オバーサマ　ケーッテ　オイデタカナ。

B　ハレ（あら）、オ珍シイ。丸井（屋号）ノ　五郎様デ　オアリルラ。ダンダン　アニサマ（兄様）ニ　似テ　オイデテ‥‥。

A　五郎デ　アリマス。直グ　オ分リタカナ。オメーサマモ　亡クナッタ　オバーサマニ　ヨク　似テ　オイデタニ。

B　左様カナ。チョード　オ茶時ダデ　チョット　オアガリテヤ。

A　オ忙シイラ。ソーソー。タボコー　黙ッテ　ムラッテ　来タデナム。

B　オイイ（いいですよ）　オイイ。村ノ　オ衆モ　ミンナ　ソー　オセルンナ（なさっているんですよ）。

A　ワシラーモ　フントワ　タマニャー　物申シニ　オ寄リセニャナー。村デ　生マレテ　村デ　シトナッテ（大きくなって）　隣リ村デ　暮シテオルンダデナム。オ茶ー　イッペー（一杯）　頂戴シテ　行カズカナ。

3．1．1　この方言に対する大方の感想

これをお聞きになって、皆さん、どんな感想をお持ちになったでしょうか。皆さんの感想をうかがうと、①とてもゆったりしている。②多彩な敬語が使われている。―こんな方が多いようです。

①の特徴は、この地方の方言は母音を大切にしているということと関連すると存じます。それに対して皆さんは母音を粗末に発音している、だからだめだというのでは決してありませんので、誤解なさらないように。この問題はまた機会を改めてお話しいたしたいと思っています。

次は「②多彩な敬語が使われている」について。この録音をお聞きになって、多彩な敬語、豊かな敬語に驚いたという方も大勢いらっしゃると思います。これはここが飯田の旧城下町に近く、かつては町では身分差・階層差が大きく、そのことが城下町の方言の敬語を発達させ、その影響が近隣の村々の方言にも及んだことが一つ、さらには村々では、同じ農民と言っても、上は名主に始まり、大地主、地主、自作農を経て小作農、さらには隷属農民に至るまで、はっきりした身分制度が確立していて、それが方言の敬語の発達と保持に役立ったことが考えられます。

さて、以上ご紹介した方言の敬語については、お話しする時間はありませんので省き、次に上伊那及びその周辺地方の言語地図の中から幾つかをご紹介しようと思います。

3．2　「上伊那及びその周辺地方の言語地図」から

上伊那地方全域とその周辺、諏訪地方のほぼ全域、中信の塩尻市の一部、

また木曽のごく一部、さらには下伊那の一部を含む地域で240地点ほどの方言調査をしました。調査は1968年夏から1974年４月。その資料で作成した言語地図の中から4枚の地図を取りだし、同音衝突ということをテーマに少しお話します。『上伊那の方言』（1977）には言語地図約290枚が載ります。

３．２．１　同音衝突とは

私共の周囲を見ると、同じ音であっても意味が違うことば、同音異義語が数多く存在しているのに気づきます。これらのことばは同音であるために、日常の言語生活の中でコミュニケーションの阻害をひき起こす、つまり同音衝突をするかと言いますと、すべての場合にそうなるとはかぎりません。そこには「堪えられる」同音異義語と「堪えられない」同音異義語があります。

例えば、虫のクモと空のクモのような場合は「耐えられる」同音異義語に属しています。なぜ「堪えられる」かと言うと、同じ文中の同じ位置で使われることはまずありえないからなんですね。

これに対して「科学」と「化学」の場合は「堪えられない」同音異義語に属しています。日常会話で「カガク、あのバケガクの方ですが」とか、「カガク、これはサイエンスの方ですが」など言い替えているのを耳にします。これは同音衝突による混乱を避けているからです。「市立」と「私立」も同じでして、日常会話の中でしばしば、イチリツ、ワタクシリツなどと言い替えて混乱を避けていることはご存じのとおりです。この辺で本題に入りましょう。

３．２．２　「きりぎりす」と「こおろぎ」

では、ここで図５「きりぎりす」の図を見ていただきましょう。ギス類の広い分布に対して、南部伊那谷最大の都会飯田の方からギッチョ類が北上しているのが分かります。ここで注意していただきたいのは、標準語キリギリスは、南部一帯では他の語と併存形で、あるいは単独で分布しているのに対し、図のＡＢ線より北では、キリギリスは塩尻や木曽地方に僅かに認められるだけで、存在していないという事実です。キリギリスは標準語であるのに、なぜAB線より北には存在しないのでしょうか。なお、言語地図では鼻濁音を書き分けていますが、小論では特にしていません。

図5「きりぎりす」

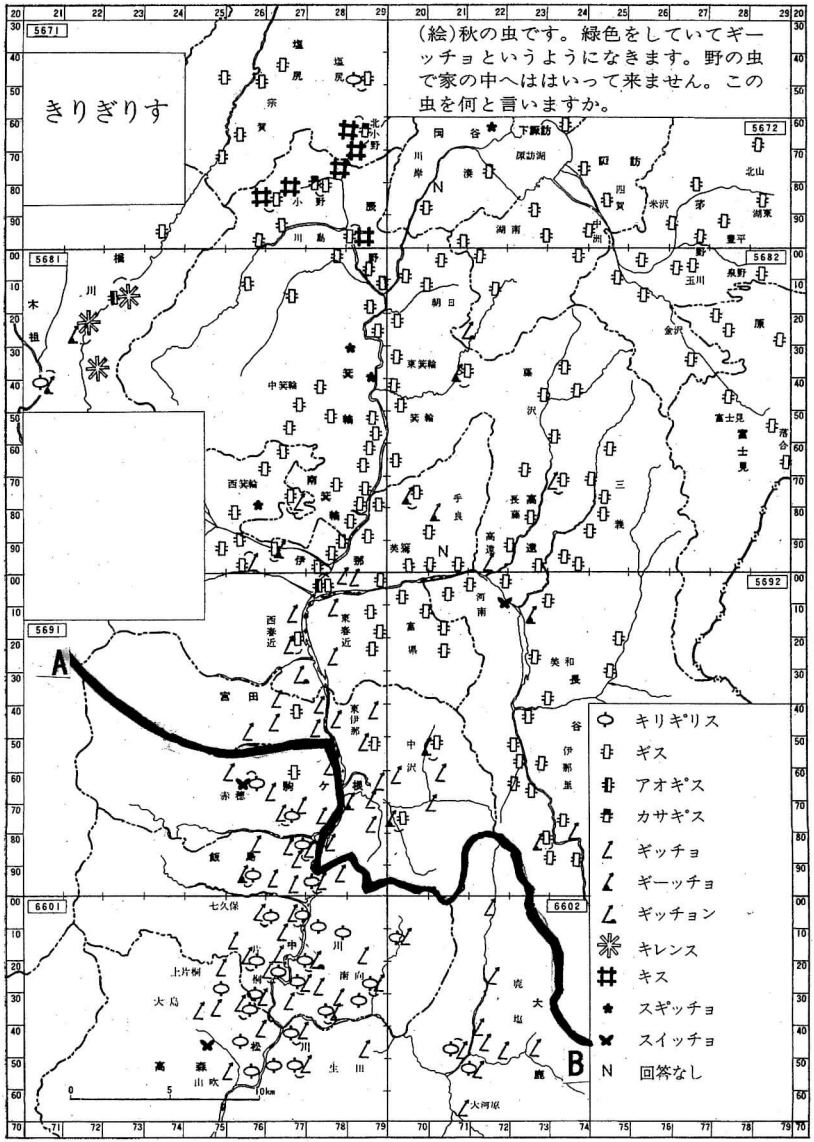
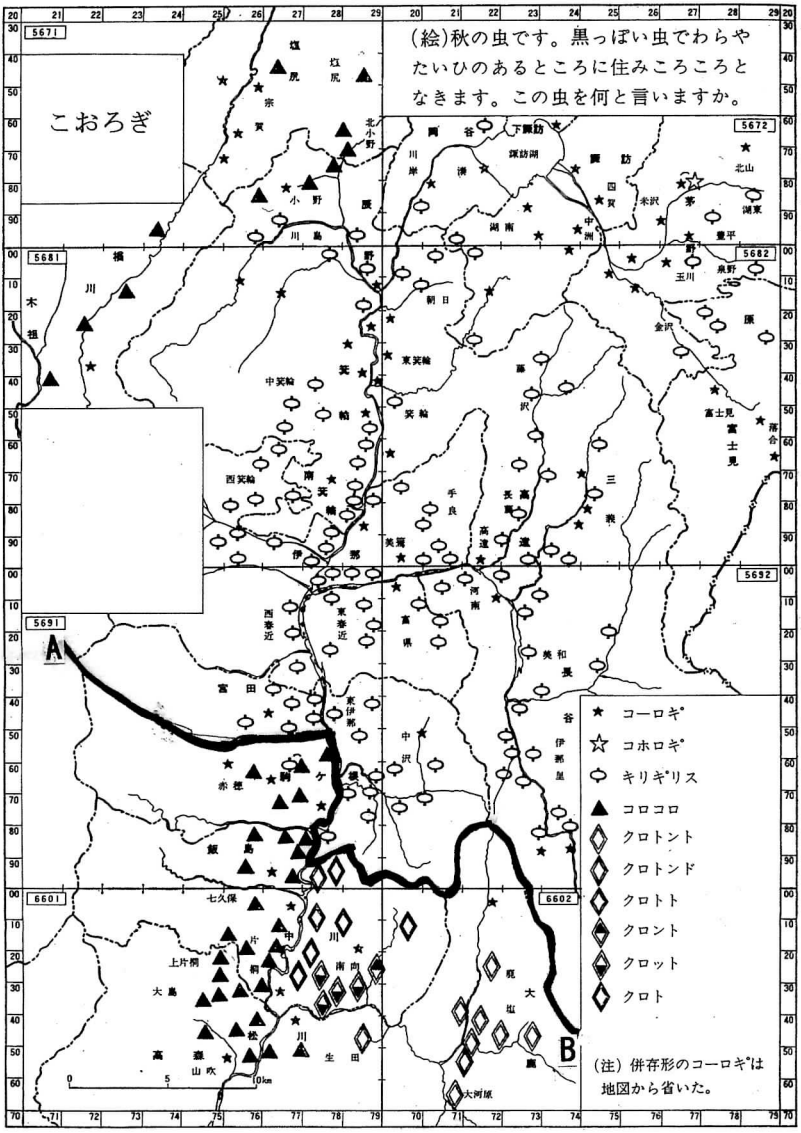

きりぎりす
(絵)秋の虫です。緑色をしていてギーッチョというようになきます。野の虫で家の中へははいって来ません。この虫を何と言いますか。
A
B
キリギリス
ギス
アオギス
カサギス
ギッチョ
ギーッチョ
ギッチョン
キレンス
キス
スギッチョ
スイッチョ
N 回答なし

図6「こおろぎ」


(絵)秋の虫です。黒っぽい虫でわらやたいひのあるところに住みころころとなきます。この虫を何と言いますか。
こおろぎ
★ コーロギ
☆ コホロギ
キリギリス
コロコロ
クロトント
クロトンド
クロトト
クロント
クロット
クロト
(注) 併存形のコーロギは地図から省いた。
A
B
5671
5672
5681
5682
5691
5692
6601
6602

3．2．2．1　AB線の北にキリギリスがない理由

それを解く鍵は図6「こおろぎ」に用意されています。図でAB線より北の地域では「こおろぎ」の方言としてキリギリスが濃密に覆っている点に注意していただきましょう。キリギリスという語は両図でほぼ「相補う分布」をしています。なぜこのような分布をするに至ったのでしょうか。

図5「きりぎりす」で、標準語キリギリスはAB線より南の地域では、標準語という資格で他の方言を追い払ったり、あるいは併存形の形で着々地歩を固めることが出来ました。しかし、AB線より北では事情が違っていました。標準語キリギリスが入り込もうとすると、そこには「こおろぎ」の方言キリギリスが座を占めています。同じように秋の虫ですから、無理に入り込もうとすると、同音衝突が起こります。そこで同音衝突を避けて、キリギリスは標準語であるにもかかわらず、「こおろぎ」のキリギリス地帯への進攻を強行できず、その結果、このような相補う分布が出来上がったのです。

3．2．2．2　「こおろぎ」を意味したキリギリス―古語の残存―

ところでキリギリスということばは古くは「こおろぎ」を意味していたと言います。例えば、

きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる

（『古今和歌集』）

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかも寝む

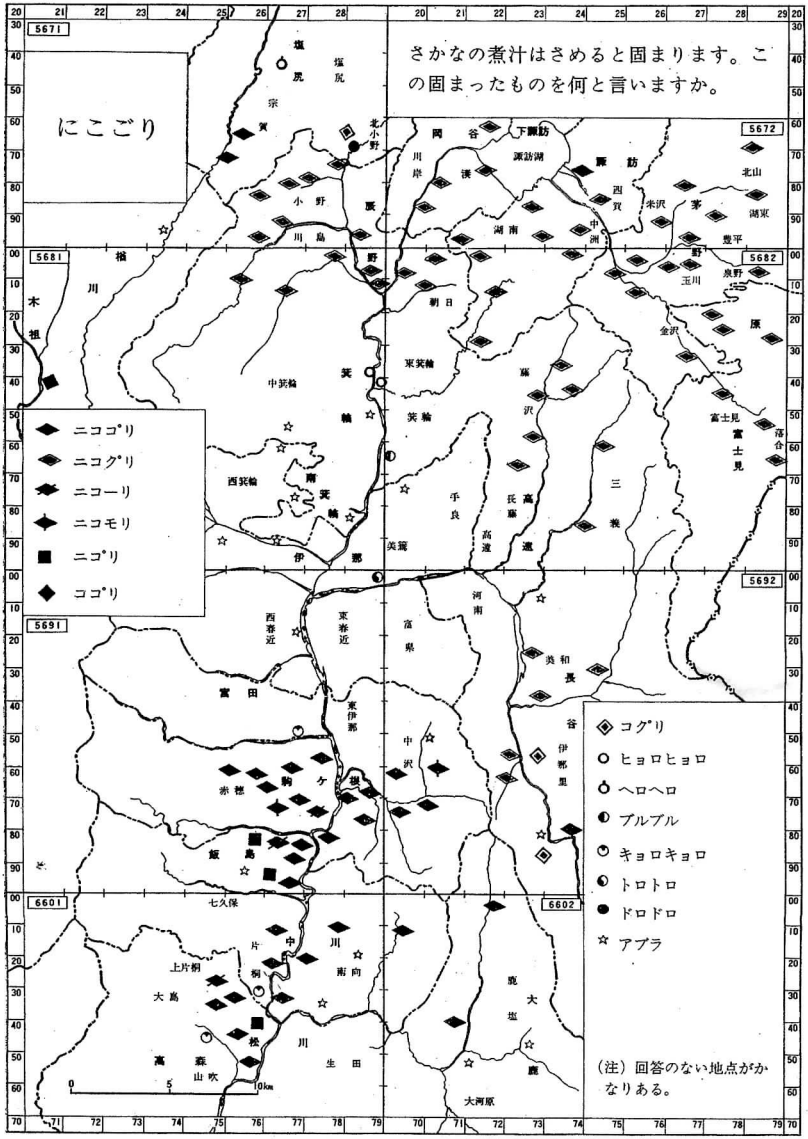
（『新古今和歌集』）

ここに出てくる「きりぎりす」はいずれも「こおろぎ」を表しました。ですから「こおろぎ」の地図のキリギリスは、古語の残存だったわけです。

3．2．3　「にこごり」と「さかなのあらと一緒に煮た大根汁」

図7で右上欄のような質問への回答を地図にしたのが「にこごり」の言語地図です。ニコゴリ、ニコグリなどニコゴリ類が広く分布していますが、不思議なことに伊那市を中心とするかなり広い放射状の地域は、ブラックホールに吸い込まれたように、ぽっかりとそこだけ語形が存在しません。よく見ると、トロトロ、ブルブル、アブラなど、苦し紛れに答えたのではないかと疑われるような回答が僅かに点在しますが、無回答の地点が圧倒的に多く、語形のドーナツ化現象が見られます。どうしてこんなことになっ

図7「にこごり」


にこごり
さかなの煮汁はさめると固まります。この固まったものを何と言いますか。
ニコゴリ
ニコグリ
ニコーリ
ニコモリ
ニゴリ
ココリ
コグリ
ヒョロヒョロ
ヘロヘロ
ブルブル
キョロキョロ
トロトロ
ドロドロ
アブラ
(注) 回答のない地点がかなりある。
5671
5672
5681
5682
5691
5692
6601
6602

たのでしょうか。

調査では図8の右上欄のような質問も用意しました。「さかなのあらと一緒に煮た大根汁」とも言うべき項目ですが、以下では「大根汁」と呼ぶことにしましょう。さて図8「大根汁」を見ますと、諏訪地方の大部分は「大根汁」を作りません。残りの地域には種々の方言が分布していますが、今はその中のニコゴリ類に注目しましょう。この類は伊那市を中心に分布し、図7「にこごり」の空白部分を過不足なく埋めています。つまり、言語地図「にこごり」と「大根汁」のニコゴリ類はきれいに相補う分布をしています。これにより、図7の中央部空白地帯の出現には図8のニコゴリ類が深く関わっていることが分かります。

3.2.3.1　相補う分布ができた理由

では、どのような理由と経過でこの分布は形成されたのでしょう。この点をしばらく考えていきましょう。「にこごり」において、初め全域をニコゴリ類が覆っていたと推定します。その後、「大根汁」でニコゴリ類が伊那市街地を中心に興り、そこから周辺に向けて放射状に進出します。当然、両者のニコゴリ類は「同音衝突」をひき起こします。「堪えられない」同音異義語であるからです。その結果、衝突を起こした地点では「にこごり」のニコゴリ類はニコゴリの名を「大根汁」に譲り、自ら身を引いて姿を消し、その後はかばかしい身代わりの方言も現れず、ドーナツの輪を広げつつこの分布は形成されたのです。

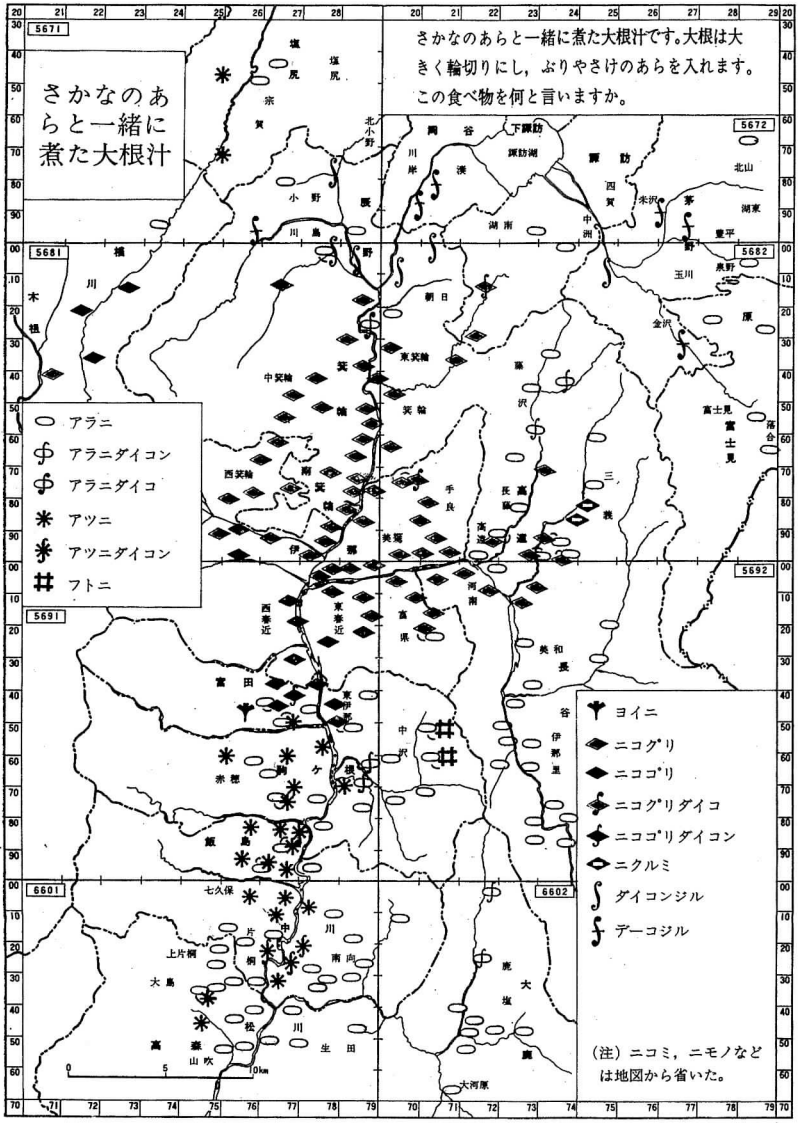
これに対し、皆さんは次のような疑問を抱かれると思います。

1　ニコゴリ類はなぜ「にこごり」から「大根汁」へと鞍替えしたのか。

2　「にこごり」のニコゴリ類は、れっきとした標準語である。にもかかわらず、そして同音衝突というバリケードがあったにもかかわらず、なぜこのような消極的な身の処し方をしたのか。

まず、1について。「大根汁」もさかなのあらと一緒に煮るので、冷めると固まる。この点「にこごり」との間に大きな類似点があります。さらに「大根汁」のアラニは分布から見て古くからこの地方で用いられていたことばで、民衆の間では新語を求める空気が醸成されていたと思われます。それにアラニという語のイメージも影響していたものと考えます。「あら」は辞書には次のように出ています。

図 8「さかなのあらと一緒に煮た大根汁」



あら［粗］①さかなをおろしたあとの頭・骨（ホネ）などの部分。②玄米（ゲンマイ）を白米にしたときに出るくず。③他人の欠点。（『三省堂国語辞典』「あら」）

アラニという語形はあまりにも直接的な表現であって、また、語感も良いとは言えません。新しい、もっと間接的な表現を望む気持ちが働いたに違いありません。このような諸条件に、後で述べる語の使用頻度、語の体系内に占める位置の問題等が絡み、ニコゴリ類は「にこごり」から「大根汁」へと移籍したのです。

次に2について。移籍したニコゴリ類は、新興都市伊那から周辺のアラニに向かい、さらに「大根汁」のニコゴリに向けて戦いを挑み、版図を拡げます。都市からの放射というのは背後に強力な後ろ楯を持つ新鋭部隊の発進にも似て、極めて強力であります。

次に使用頻度を見ると、「にこごり」と「大根汁」とでは、後者が前者よりも圧倒的に高いと言えます。さらに語の基本度を考えますと、「大根汁」の方がより基本的で、「にこごり」は語彙体系のいわば周辺に位置すると言えます。つまり「にこごり」は言語生活の中で場合によっては「無くてもすまされる」語であります。

このようにして「大根汁」のニコゴリ類は、都市という威光を嵩に、頻度数・基本度の圧倒的優位をバックに、標準語の資格を持つ「にこごり」のニコゴリやニコグリを同音衝突の障害を粉砕しつつ、自己の領域を広げえたのであります。

4．中信地方の方言

松本平とその周辺地方及び木曽地方を―この地方を中信と名づけました。松本平とその周辺地方を安筑地方と言うこともあります。

初めに中信地方の北部大町市の方言会話を紹介し、そのあと、方言の敬語、移住と方言、混交、推量表現ズラとダラズの問題を手短にお話しいたしましょう。

4．1　大町市街地方言の会話―煙草屋の店先で―

「南信地方の方言」の最初で上伊那郡中川村葛島方言の会話をお聞きいただきました。そのテープを大町市街地の方々にお聞かせし、大町市街地方言による「煙草屋の店先で」を作っていただきました。矢口ちはる氏

(1913年生）が中心となり、田中博氏（1913年生）らのご協力で作成したもので、録音は矢口市朗氏（1934年生）ご夫妻によります。中川村葛島方言と比較していただきたいと存じます。

A　コンチワー。コンチワー。イネカイネー。(大きな声で）コンチワー。コンチワー。誰モ　イネダカイ。タバコ　オクレヤ。(応答なし）黙ッテ　ムラッテクデネー。エコー　二ツ。260円。コケー　置イトクジ。ヤー　オババ　ケーッテ来タカナ。

B　コリャ　珍シイ。丸井ノ　ゴロ（五郎）サジャネーカネ。ジョン（順）ニ　兄ッコニ　似テ来テ‥‥。

A　ソーセ。五郎ダワイ。スグ　分カッタカイネ。オババモ　死ンダ　ババニ　良ク　似テ来タジ。

B　ソーカイネ。丁度　オ茶ノ　ションダニ　チョックラ　上ガリマショヤ。

A　忙シイズライ。ソーダ。タバコ　黙ッテ　ムラッタジ。

B　イインネ、イインネ。村ノ　ショーモ　ミンナ　ソーシテルダワイ。

A　オラモ　タマニャー　顔出ショ　シナケリャナー。村デ　生マレテ　村デ　デッカクナッテ　隣リ村デ　暮シテルダデネ。オ茶　イッペー　ムラッテ　行カズカナ。

4．2　方言の敬語

先ほどの中川村葛島方言と比べると、皆さん、「敬語が少なくなった」とおっしゃいます。たしかにそうで、方言の敬語については機会を改めてお話ししないといけませんが、先の中川村葛島方言の場合を「複雑敬語方言」、大町市街地方言のような場合を「単純敬語方言」と名づけました。

方言の敬語についてもう一つ「無敬語方言」というのがありまして、最近松本市に合併された旧南安曇郡奈川村の方言などはそれに当たります。

「煙草屋の店先で」の奈川方言の場合を途中までお目にかけましょう。

協力してくださったのは古宿という集落の忠地まつの氏（1906年生）を中心に、忠地秀一氏（1930年生)、忠地愛子氏（1933年生)。なお、この方言ではカ行子音の語頭以外の有声化が認められますが、それはこの会話には示していません。また、ごく最近松本市に合併されたことからも分かるように、近年松本市や松本平の方言の影響がかなり顕著ですが、ここでは

戦前戦中頃の奈川村方言ということで作成しました。

A　居タカー。居タカー。誰モ　イネカヤ。（大きな声で）ヤッ、誰モイネダカヤ。タバコ　売ッテクロ。（応答なし）黙ッテ　ムラッテ行クゾ。　バット　二ツ　。カネ　コケ　置イトクゾ。ヤッ、ババケッテ（帰って）　来タヤー。

B　コリャ　ハールカブリ（久しぶり）ダナ。ワリャ　丸井ノ　ゴロ（五郎）ジャ　ネーカ。ジン（順）ニ　兄ニ　似テ来タナー。

A　オー、ゴロダゾ。スグ　分カッタカ。

B　オー、分カッタゾ。

A　ワレモ　死ンダ　ババニ　似テ　来タゾ。

B　オー　ソーカ。丁度　茶時ダニ　ヒトッキラ　寄ッテケ。―下略―

4．2．1　方言の敬語の3分類

私はこの種の方言に「無敬語方言」という名を与えました。方言の敬語は「複雑敬語方言」「単純敬語方言」「無敬語方言」の三つに分類できるというのが私の考えなんです。

4．2．2　敬語使用と敬意

ただ、注意していただきたいのは、敬語の使用と敬意とは必ずしも正比例していないんですね。ですからばか丁寧な敬語使用はかえって敬意を疑わせることにもなり、まさに慇懃（いんぎん）無礼にもなるわけです。敬語の有無はその方言なりその言語の問題であります。

例えば、日本語では「行く」ということばも、「いらっしゃる、おいでになる」（尊敬語）、「まいる、うかがう」（謙譲語）などと、相手と自己との関係によって変わります。一方、英語goは日本語とは違い、人称語尾(e)sのようなものを除けば、相手と自己との関係で変わるということはありません。つまり、日本語のような敬語はありません。だから、英国民は敬意が無いとか、英国民は粗野だなどとは言えません。くだくだしくなりますが、私の言いたかったことは、「無敬語方言」の人達は無敬語だから敬意が無いとか、粗野だとかなどとは言えない

ということであります。

4．3　移住と方言

ヨーロッパの方言研究書をひもとくと、移住とことばに多くのページが

割かれています。日本ではこのテーマが話題に上ることはそれほど多くはありません。時として北海道移住が問題になる程度であります。信州はどうでしょうか。長野県の方言研究で移住の問題が取り上げられたことは、今までほとんどなかったと言ってよいと思います。だが、細かに見ると、移住を抜きにしては考えられない方言的特徴に行き当たることが何例かあります。今日はその中の1例だけご紹介しましょう。

4.3.1　中山道奈良井下町の場合

中山道の宿場町奈良井（現塩尻市）は昔の面影を今に留め、訪れる観光客で賑わっています。町は北、松本寄りから下町・中町・上町とに分かれて、約1キロにわたり家並みはびっしりと細長く続いています。

4.3.1.1　3音節形容詞のアクセント

この町並みの中に方言のかなり重要な体系の違いが認められます。表1をご覧下さい。3音節形容詞は「厚い・赤い・浅い‥‥」の第1類と「暑い・黒い・白い‥‥」の第2類からなります。この二つの類が上町と中町では○●●／○●○のようなアクセントの対立がありますが、下町では共に○●○で両類のアクセントの対立がありません。上町や中町のような○●●／○●○の型は信州の大部分の地域を覆っています。一方、両類の対立のない○●○型は近くは飛騨・美濃、やや離れては尾張に分布し、信州でも飛騨・美濃と接する松本市奈川、旧木曽郡開田村西野、同南木曽町田立・吾妻の一部に認められます。だが、奈良井下町は飛騨や美濃と直接接してはいません。ですから飛騨や美濃から地を這うように下町に伝播したとは考えられません。

類／語例	第一類	第2類
	厚い・赤い・浅い‥‥‥	暑い・黒い・白い‥‥‥
上町・中町	○●●	○●○
下　　町	○●○	

○は低、●は高の音節を表す。

表1　奈良井宿3音節形容詞アクセント

4.3.1.2　奈良井宿下町のルーツ

奈良井宿下町・中町・上町はそれぞれ職人所・公卿町・宿場町と言われます。下町は曲げ物や櫛を作る職人が住み、中町は支配階級の旦那衆が住み、上町は旅人宿が立ち並ぶところから、この名があります。したがって、

下町／中町・上町の対立は職人層／非職人層としてとらえられます。そこで下町の方言的特徴を元に次のような下町の歴史を推測しました。

職人たちがかつてある時期飛騨または美濃方面からやってきて下町に定住し、今に至った。下町方言における3音節形容詞の飛騨・美濃的特徴は、移住という歴史的事実の方言への反映である。

4.3.1.3　地元の証言

私は下町のルーツを飛騨あるいは美濃からの移住と見る考えを、資料収集当時の楢川村教育長土川克広氏に話したところ、氏は身を乗り出すようにしてこう言われたのを思い出します。

下町は数百年前、飛騨からの移住者によって開かれたという伝えがある。証明する文書類は一切ない。今、それを裏付ける方言の特徴が下町にあると聞き、驚くと共に嬉しい。

それにしても一続きの宿場町の中で、部分的にもせよ、故地の方言的特徴を伝えているのは、職人集団が中町・上町居住集団とは社会的に一線を画しながら近年まで推移したことを物語っています。ここに移住の問題と共に、職業に関わる階層の問題も浮かび上がります。

4.4　ズラとダラズ—六万石ことばと十万石ことば

4.4.1　ズラとダラズ—中信／北信

雨が降ルズラ。　　雨が降ルダラズ。

共に「雨が降るだろう」という意味ですが、ズラとダラズは中信と北信の方言を分かつ重要な指標となっています。

犀川に沿って国道19号線を松本方面から長野方面へ向かうと、北信と接する大町市八坂まではズラを使っています。ところが八坂から一歩北信の長野市大岡（旧更級郡大岡村）や上水内郡信州新町に入ると、そこはダラズの世界。ズラはもう使いません。

4.4.2　六万石ことばと十万石ことば

松本方面から向かうと北信の取っ付きの集落は旧大岡村川口。犀川に臨んでいます。川向こうは信州新町日名で、そこには松代藩の渡し場もありました。川口のおじいさんは私にこうおっしゃいます。

わしらは行クズラだの、書クズラだの、ズラことばは使わない。ズラはもともと六万石ことばだ。ここは十万石。よって十万石ことばダラズを

使う。

言うまでもなく、六万石は松本藩、十万石は松代藩を指します。おじいさんの態度には十万石ことばへの自信と誇りがうかがわれます。

4.4.3　ズラとダラズの境界―江戸時代

江戸の昔もズラとダラズの境界が現代と同じであったかどうかを考えましょう。十辺舎一九『道中続膝栗毛』を見てみましょう。

木曽路から松本平にかけては、ズラは「ずらア」として土地の者の会話にしばしば登場します。しかし、ダラズは1例も姿を見せません。例えば、その八編「従木曽路善光寺道」(1816) には「ずらア」が次のように使われています。所は松本の城下町、茶屋の女房と土地の太五七の会話です。

女房「太五七どん太五七どん、村井のはうから役者が来るずらア。まんだやつとあひだがあらずか。

太五七「村井の喧哘（けんくわ）は、おもしろかつたのへ。もうその役者はとつくにこつちのはうへ来たずらア。

ところが、舞台が松代藩の水内（みのち）（現信州新町）に移ると、そこはダラズの世界。九編「善光寺道中」(1819) の中から引きましょう。きた八とおやぢの会話です。

おやぢ「わしおえど（江戸）でむずすめない（＝とんと分からない）こたア手の筋（すぢ）を見るばつかぢやアない。おえどぢやア足のすぢも見るだらずか。

きた八「十二足の筋を見るものか。

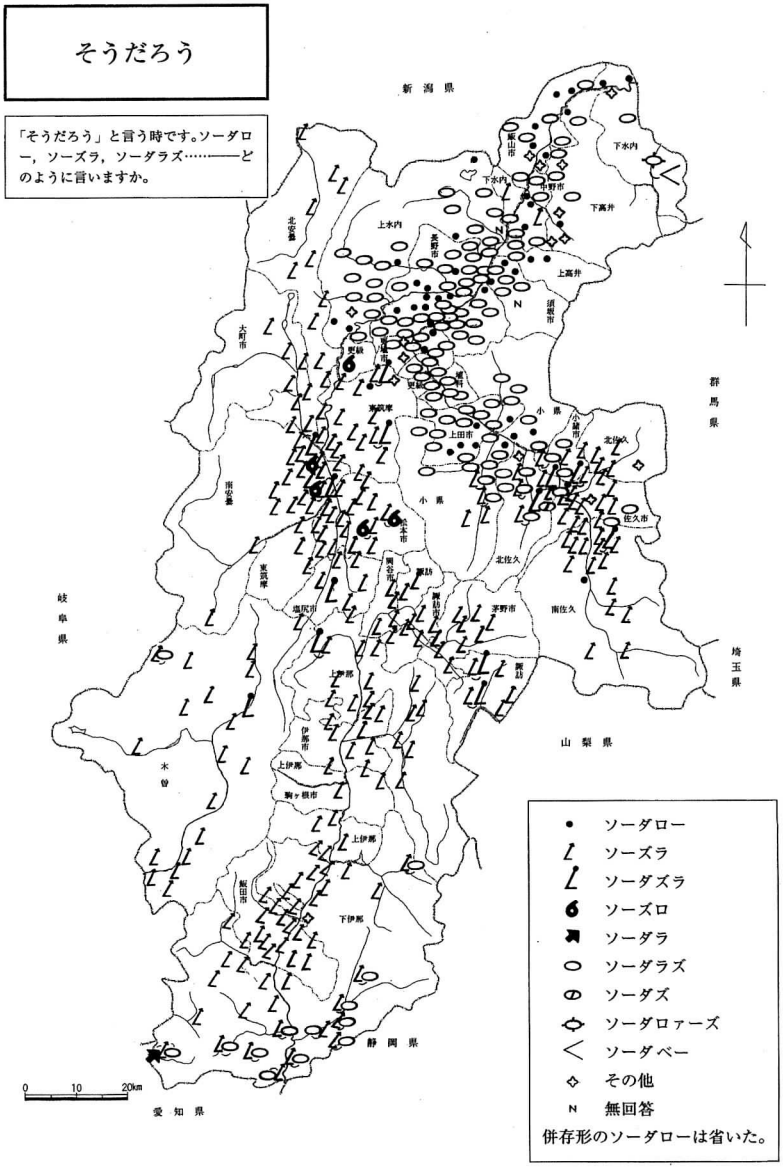
おやぢ「そんでも、手のかいてある看板の出てあるとこは、手のすぢを見るとこだらずが、足の看板の掛けてあるとこは、足の筋でも見るだらずと、わし思つたことのへ。

このように一九は、土地の者に松本藩領では「ずらア」松代藩領に入ると「だらず」を使わせています。幕藩体制が崩壊して130年以上経った今も、古い藩の境界が方言の境界としても行き続けていることは、まことに興味深いことといわねばなりません。

4.4.4　分布と語源

長野県言語地図「そうだろう」(図9) をご覧下さい。長野県言語地図については詳しくは『長野県史方言編』(1992) の631ページ以下を参照し

図9「そうだろう」


そうだろう
「そうだろう」と言う時です。ソーダロー，ソーズラ，ソーダラズ……――どのように言いますか。
新潟県
群馬県
埼玉県
山梨県
静岡県
愛知県
岐阜県
ソーダロー
ソーズラ
ソーダズラ
ソーズロ
ソーダラ
ソーダラズ
ソーダズ
ソーダロァーズ
ソーダベー
その他
無回答
併存形のソーダローは省いた。
0 10 20km

ていただきたいが、ごく簡単にその概略を述べると、調査地点424、調査期間は1974年度～1978年度（以後補充調査）。『長野県史方言編』（1992）には200枚の言語地図を収載します。

図９でダラズが北信全域と東信の北信寄りの若干地域、そしてズラが中南信一帯に分布しています。ただ、注意しなくてはならないのは、中南信の山村に十数地点ダラズが認められる点です。この分布から分かることは、ある時代信州全域ダラズが分布していたということです。その後、南部からズラが入って来て北上を続け、このような分布が形成されたと推定されます。

ズラは、前にも触れたように、語源は異論もあるが「むとすらむ」に由来すると私は見ます。「むとすらむ」はさらに「むずらむ」へと変化します。『落窪物語』（10世紀後半）を見ましょう。

君や夜さりおはせむとすらむ。いかに思ほさむずらむ（『落窪物語』一）。
（大意。六条の君は夜もお出でになるだろう。この様子をお聞きになってどうお思いになるだろう。）

ここには「むとすらむ」のほか「むずらむ」も現れています。この語はさらに「んずらん」を経て「うずらう」と変化し、さらに「ずらあ」となります。『続膝栗毛』の例が「ずらア」となっていますが、これはズラよりも古い段階にあることを示しています。

ダラズは「にてあらむとす」に由来します。「にて」は「で」と変化し、「あらむとす」は「あらうず」となり、「であらうず」がつづまって「だらず」となったものと考えられます。

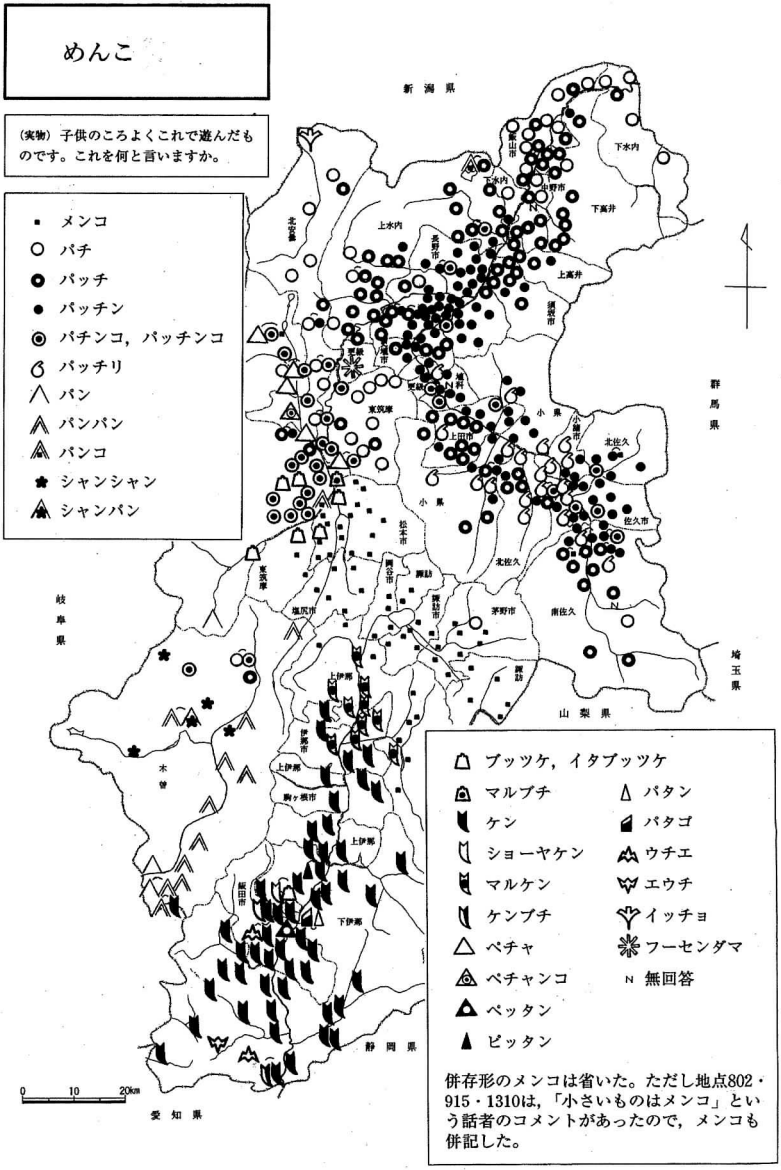
４．５　混交

言語地図を見ると、「混交」という事例が大変多いのに驚きます。以前は「混淆」と書きました。『岩波国語辞典』で「こんこう［混交・混淆］」を引くと、「異種のものが入り混じること。〈略〉」のように出ています。これだけではお分かりにならない方が多いと思います。実例によって示しましょう。図10「めんこ」をご覧ください。県下の「めんこ」の方言が30近く並んでいます。

４．５．１　シャンパン

４．５．１．１　シャンパンの成立

図10「めんこ」


めんこ
(実物) 子供のころよくこれで遊んだものです。これを何と言いますか。
メンコ
パチ
パッチ
パッチン
パチンコ，パッチンコ
パッチリ
パン
パンパン
パンコ
シャンシャン
シャンパン
新潟県
群馬県
埼玉県
山梨県
岐阜県
長野県
静岡県
愛知県
0 10 20km
ブッツケ，イタブッツケ
マルブチ
ケン
ショーヤケン
マルケン
ケンブチ
ペチャ
ペチャンコ
ペッタン
ピッタン
パタン
パタゴ
ウチエ
エウチ
イッチョ
フーセンダマ
N 無回答
併存形のメンコは省いた。ただし地点802・915・1310は，「小さいものはメンコ」という話者のコメントがあったので，メンコも併記した。

木曽の中央部を見るとシャンパンというなんともフランス的香気の漂う呼び名があります。木曽の子供たちはどうしてこんなハイカラな名前を「めんこ」につけたのでしょう。

木曽の中部を見ていただくと、シャンシャンが分布しています。これは木曽の中心地木曽町の福島から周辺に分布を広げたものと考えられます。シャンシャンという方言は「めんこ」を使ってする遊びの掛け声に由来するのではないかと思いますが、詳しいことは良く分かりません。一方、木曽谷の南部からはパンパンという方言が中山道に沿って北上します。パンパンは「めんこ」を地面に打ちつける時発する音を表したものでしょう。パンパンと畳語せず、単にパンとした地点もあります。

このシャンシャンとパンパンとが互いに交差して生まれたのがシャンパンです。このような現象を「混交」と言います。トラエルとツカマエルからトラマエルが生まれたり、ヤブルとサクからヤブクが生まれたりするのも「混交」のなせるわざです。

4.5.2　ペチャンコ

4.5.2.1　ペチャンコの成立

松本平の北部大町市の南部に1地点ですが、ペチャンコという語が認められますね。なぜ「めんこ」がペチャンコなんでしょうか。

地図を見ると、パチンコが大町市街地を不完全ながら取り囲むように分布しています。そして市街地にはペチャが多く見られます。そしてペチャンコはパチンコとペチャの接触地帯に認められますので、両語の混交によって生まれたものと言えます。

もっともパチンコも、分布から見て古くからあったパチと新たに松本方面から北上するメンコとの混交形とも見られますので、ペチャンコは二重の混交によって生まれたとも考えられます。

なお、パチもペチャも「めんこ」を地面に打ち付けて遊ぶ時に発する音を模したものでしょう。

終わりに

長野県を4地域に分け、録音をお聞かせし、各地域の方言の特徴を幾つか取り上げてお話ししました。一口に長野県の方言とか信州の方言とか申

しても、かなりの地域差のあることをお分かりいただけたと存じます。その上で、「方言には古語が残る」と申しますが、その実例を幾つかお話しする一方、方言の新しい展開についてもお話ししました。さらに方言の敬語、「同音衝突」と「混交」、また、移住と方言、推量表現ズラ・ダラズ・ベーについて駆け足でお話しいたしました。そんなわけで機会を改めてとして簡略に済ませたところも何箇所かありました。

最後に「方言研究は何の役に立つか」「方言研究で何が分かるか」についてお話したかったのですが、もはや時間を大幅に超過していますので、レジュメに掲げた項目を読み上げるにとどめます。

1　方言の変化の種々相を明らかにする。
2　方言の歴史を明らかにする。
3　日本語史の解明に役立つ。
4　日本語政策に寄与する。
5　地方史の解明に役立つ。
6　日本文化の形成過程の解明に寄与する。

これらについては、すでに幾つかについてはお話しましたが、この問題も機会を改めてお話が出来れば幸せに存じます。本日のつたないお話が方言について、また、広くことばについて関心をお持ちになる契機となるならば幸せであります。

終わりにあたり、このような公開講座を開催し、地域に開かれた大学を標榜してその実践を進める上田女子短期大学の関係各位に敬意を表すると共に、お世話いただいた大橋敦夫先生に感謝申しあげます。そしてご静聴下さった皆様に心より御礼申しあげます。

主要参考文献

長野県史刊行会編（1992）『長野県史方言編』（執筆　馬瀬良雄）
馬瀬良雄（1977）『上伊那の方言』上伊那誌編纂委員会
馬瀬良雄（1992）『言語地理学研究』桜楓社
馬瀬良雄（2003）『信州のことば―21世紀への文化遺産』信濃毎日新聞社
馬瀬良雄（序文佐藤亮一）（2002）『信越国境秋山郷談話資料』（文部科学省特定領域研究、「環太平洋の言語」日本班成果報告書A4－010）

馬瀬良雄ほか（1982）『信越の秘境秋山郷のことばと暮らし』第一法規出版
渡辺喜代子（2005）『川中島の昔のはなし―「万傳書覚帳」の世界―』

辞典類（「方言集」の類を含む）

『岩波国語辞典　第6版』西尾実ほか編、岩波書店（2000）
『広辞苑　第５版』新村出編、岩波書店（1998）
『三省堂国語辞典　第４版』見坊豪紀ほか、三省堂（1992）
『日本国語大辞典　第２版』日本大辞典刊行会編、小学館（2000～02）
『日本大文典』J.ロドリゲス原著、土井忠生訳・註、三省堂（1955）
『日本方言大辞典』徳川宗賢監修　編集委員　徳川宗賢・佐藤亮一、
小学館（1989）
『東信濃方言集』上原邦一著、国書刊行会（1976）
「方言」『南佐久郡志』（1919）
『俚言鈔』武田喜伝治（1875）